

知立の瓢箪加工職人とその現場

極細のワイヤーに通電して、瓢箪の曲面の外皮を焼き切る。關さん独自の加工方法だ。設計は約1ミリ刻み、自作の工程表で焼き切る順序を細かく管理している。「瓢箪の加工に教科書は無い、失敗したらどう直すかを考えるのが楽しい」そう語る關さん。およそ10年、知立市で瓢箪を素材にして作品を作り続ける職人・關さんに、知立と瓢箪の関係や瓢箪の魅力、今後について話を伺った。

關 勝 (せき まさる)

昭和19年8月3日生まれ 知立愛瓢会会長
71歳の時、テレビでひょうたんランプを見て「子どもたちと作ろう」と、思ったことがきっかけで瓢箪加工の道へ。ワイヤーで文字や模様を焼き切った後、浮かせて接着するといった立体的な加工が得意。表紙は知立市制55周年を記念する瓢箪作品を制作する様子。



▲表紙のように焼き切った後は、パーツが瓢箪の中に落ちないように、マチ針で丁寧に持ち上げる。息をのむ繊細な作業だ。



▲抜いたパーツは工程表と対応させた番号で管理。紛失・混在を防止している。



知立愛瓢会とは

ひょうたんの栽培・加工技術の普及と文化振興に取り組む全日本愛瓢会の下部組織。令和6年には知立市で「第49回全日本愛瓢会愛知県知立市大会」が開催。名誉総裁をつとめる秋篠宮さまにご出席いただいた。

—— 知立と赤瓢箪

知立と瓢箪には、確かなつながりがある。壮麗な山車で知られる知立まつりでは、山車の宮入前に赤瓢箪を知立神社へ奉納する神事が行われる。「赤瓢箪の奉納があって初めて祭りが始まると思っている」と、關さんは言う。例年12月の交通安全啓発活動では、知立愛瓢会で制作した赤瓢箪のストラップを配布している。7年続くこの活動には、神事を広く市民に知ってもらいたいという願いも込められている。

—— 瓢箪の魅力、加工の面白さ

まずは形だ。真上から輪郭が真円に見えて、くびれの曲線がなめらか。そこに美しさが宿る。「丸い形は人を和ませる。丸いから誰も気分を悪くせず、落ち着ける」と、關さんは語る。加工について聞くと、「世界に一つだけができること」それが手仕事にこだわる理由だ、と關さんは言う。制作過程の面白さはどこにあるのか。「失敗が一番面白い。失敗しないようにやっても失敗する。そのときどう修復するか、対策するかを考える時間が面白い」と、關さんは続ける。見せ方は奥行で決める。どこを一番手前に、どこを引っ込めるかを理屈で組む。順序は工程表



◀焼き抜く箇所・順番が細かく分けられた工程表。理屈で準備するからこそ、実際の作業を感覚的に行える。



▲焼き抜き、浮かせて接着する。1ミリ単位の調整が、きれいかつ立体的に見せるコツ。

で番号管理。「A1は16番目、A5は1番目……のように焼き抜く順を決めておく」これも失敗から生まれた対策だ、と關さんは語った。

—— 瓢箪を通じた「瓢育」

保育園や小学校と連携し、苗づくり、植え付け、水やり、収穫、天日干し、作品制作までを園児や生徒が体験する活動を行っている。「今の子どもはタブレットを使い、瓢箪作品への配色を試す。道具を生かすのがうまい。自由な発想に、逆に学ばされる」と、關さんは言う。狙いは地域のコミュニケーションと子どもの向上心の育成。生涯学習の一環と位置づけ、瓢箪を通じたこの取り組みを、關さんは「瓢育(ひょういく)」と呼んでいる。

—— 瓢箪加工のこれから

71歳で加工を始め、現在81歳。制作に入ると、食事も忘れるほど手は止まらない。そんな關さんは、加工の工程を画面化するなどして、瓢箪加工の継承を意識している。「71歳から始めた私でもできた。だから、誰でも始められる。誰でも入れる入口を作っていきたいね」